

令和元年6月17日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02465

研究課題名(和文) 社会運動としての女性文学

研究課題名(英文) Women's Literature as Social Movement

研究代表者

松永 典子 (Matsunaga, Noriko)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授

研究者番号：00579807

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：この研究課題では、ポストフェミニズムという現象と第二波フェミニズムとの対立的図式の再考を目指して、新自由主義の文脈からおもにイギリス文学を対象に研究した。具体的には、Virginia Woolfの女と職業、Vera Brittainの教養小説、Mary Poppinsに描かれるケア労働者表象、ジンという私費流通を特徴とする私費出版文化を考察した。こうした幅広い研究対象を設定することによって、女たちの経験の意味を社会運動の文脈から拡張・再定義することを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は第一に、第二波ポストフェミニズムの近似的関係を読み解きつつ、包括的視点を取り入れることによって、フェミニズム/ジェンダー研究に新たな視座を与えたことである。第二に、自伝、教養小説という文学ジャンルを、社会運動の文脈において考察することで、アイデンティティの文学としてだけでなく、社会運動の文学としての可能性を広げた。第三に、第二波ではなく、ポストフェミニズムとの関係からV.Woolfを再評価したことである。Woolfはモダニズム作家でもあるので、これにより英文学におけるモダニズム再考をもたらした。

研究成果の概要(英文)：In this project, I examined the belief in the binary opposition between “postfeminism” and Second-wave feminism especially in terms of neoliberalism in British literature. I studied a variety of literary topics such as Virginia Woolf’s reconsideration on women and profession, Vera Brittain’s novel of development, P. L. Travers’s care worker representations in *Mary Poppins*, and the DIY(Do It Yourself) culture of “zines” or self-published works. By contextualizing these topics, I tried firstly to reexamine the meanings of feminism as a social movement, and secondly to reconstruct a theory on zine from the point of view of contemporary critical theory and feminist literature.

研究分野：英文学

キーワード：フェミニズム ポストフェミニズム ジェンダー イギリス

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、21世紀転換期のポストフェミニズムという現象を、20世紀の女たちの文学の関係から再検討し、両者を分断ではなく連続体として位置づけることを目的としたものである。本研究においては、とくに、(1) 第二波フェミニズムとポストフェミニズムの関係性(連続/分断)、(2) 女の「労働」、(3) フェミニズムにおける自伝、伝記、教養小説という文学ジャンル、という三つの文脈を重視した。

研究の契機となった「ポストフェミニズム」とは、今日のジェンダー研究および女性学の確立に大きな影響を与えた第二波フェミニズムの産物と言ってよいだろう。多様かつ長い歴史をもつフェミニズムは一般に、政治的権利を求めた第一波フェミニズム、文化的社会的承認を求めた第二波フェミニズムのように区分して説明される。そうした第一波や第二波がフェミニズム運動と呼ばれるのに対して、1990年代以降、2000年代あたりにかけて見られるポストフェミニズムは運動を意味しない。それは、1970年代、80年代の第二波フェミニズムの成果を根底から壊す動きであるが、フェミニズムが完全に否定されることもない。ポストフェミニズム言説においては、第一波の主たる主張であった政治的権利を常識として否定されないという意味でフェミニズムは肯定されるが、第二波が標榜した経済的文化的社会的運動は否定される。つまり、ポストフェミニズムとは、フェミニズムに対して否定と肯定の言説があることを示す批評用語である。

こうした第二波フェミニズムの成果を否定するようなポストフェミニズムの動向に対して、フェミニズム批評はさまざまな議論を展開してきた。第二波の時代を自ら見知っている世代の研究者 P. Waugh などによる研究はおもに第二波フェミニズム再評価の観点からおこなわれてきたが、本研究で注目したのは、20世紀から21世紀にかけてのフェミニズムを連続体として捉えようとする研究である。そうした例が竹村和子編著の『“ポスト”フェミニズム』(2003)であり、Stephanie Genz and Benjamin A. Brabon の *Postfeminism*(2009)である。前者の竹村は、フェミニズムはつねに過程の段階であり、もはや「女」という存在そのものに疑義があるのだから、その内実をつねに自己参照的に問いかけ続けようとする。竹村はまた、フェミニズムとはつねになにかの後(ポスト)であり、生成過程にあるものであり、「ポスト」に「自己参照的」「自己批判的」「自己増殖的」の意を読み込む。いわば竹村の「ポスト」フェミニズムのダブルクォーテーションの記号は「ポスト」を強調させることによって、その語の持つ潜在的意味を読者に示唆する意図を持って用いられたと考えられる。後者の Genz and Brabon も竹村と同様に、第二波と90年代以降のフェミニズム言説との連続を重視する。そのため、意味上の亀裂を感じさせるような偏見のある解釈を回避させるため、記号(“ ”)なしの「ポストフェミニズム」という表記を用いることを提唱した。竹村や Genz and Brabon が考察するように、ポストフェミニズムを、フェミニズムという長い歴史を持つ社会運動との関係性を考えるためには、短期的ではなく長期的パースペクティブが必要であろう。

同様に、90年代後半の Judith Butler と Nancy Fraser の承認/再分配論争の議論が示すように、フェミニズムに求められているのは二項対立的議論ではなく、両者を包括的また同時に語ることだろう。またポスト冷戦後の今日、文学・理論研究の見直しが近年盛んである。「モダニズム」の枠組み構築が始まったのは20世紀半ばであるが、近年、その枠組みに対する見直し(遠藤編著論集『転回するモダン』2008)や、それと連動するかのよう、モダニズム期における教養小説の衰退を論じる研究などが注目されている(J. Esty, *Unseasonable Youth*, 2013)。その現象を冷戦期の研究上の枠組み再考と捉えるならば、冷戦期と第二波の女性運動が同時期であったことは注目すべきであり、冷戦の文脈からの第二波の見直しが求められる。こうした研究動向からポストフェミニズムという現象を考えるならば、それを21世紀転換期の一時的現象としてではなく、「長い20世紀」の現象として捉えることが求められている。

以上のように、本研究課題においては、(1) 竹村および Genz and Brabon が切り拓いたフェミニズムの連続(第二波とポストフェミニズムの連続性)という問題および関心を共有するとともに、(2) Nancy Fraser と Judith Butler の議論に示されるような承認/再分配の問題を女の「労働」問題の考察、(3) 個人の経験を社会と共有する文学ジャンルとして自伝および教養小説の可能性を再検討する、ことを構想した。

## 2. 研究の目的

上記に述べたように、本研究「社会運動としての女性文学」は、否定されると同時に肯定されるという奇妙なフェミニズムのメカニズムを、21世紀の世紀転換期の現象ではなく長い20世紀という視座から捉えなおすことによって、ポストフェミニズムという現象の批評的可能性を読み取ることを目的としたものであった。とくに、社会運動における発信の方法としての自伝的手法に注目し、第一波フェミニズムから今日のフェミニズムにいたる女性作家による「働く」女性表象を、自伝・教養小説の発展と衰退の文脈において分析した。Virginia Woolf の女と職業、Vera Brittain の教養小説、*Mary Poppins* に描かれるケア労働者表象、ジンという私費流通を特徴とする私費出版文化など、幅広く研究対象を設定することによって、ひとつではない女たちの経験を社会運動の一部としてとらえ、また、その経験の意味を拡張・再定義することを試みた。

### 3. 研究の方法

本研究課題では、「20世紀」の英国フェミニズム理論/実践を、文学ジャンル(自伝・教養小説)の観点から分析し、社会運動全体のなかでのフェミニズムおよび文学の役割について「継承」「継続」「分断」をキーワードとして明らかにすることを目指した。継続の観点から、主たる分析対象は各フェミニズムのムーブメント(第一波、第二波)の最盛期よりも「ポスト」の時代の文学作品を中心とした。

研究方法としては、以下の三つの方法をおもに採った。(本文中の 番号は後述の「5. 主な発表論文等」を指す。)

(1) 論文および学会誌の編集: 学会誌における特集号の編集委員を務めた。第一に、新英米文学会の会報誌における「フェミニズム」特集号の責任編集を務めるとともに、二つの論文を執筆した(雑誌論文 と )。第二に、日本ヴァージニア・ウルフ協会編著による論文集の編集委員を務めるとともに、論文を寄稿した(図書 )。

(2) 作品収集: 英語圏の私費出版文化を調査するために、現地調査(2016年のロサンゼルスおよびサンフランシスコにおける zine festival 参加および個人書店、2018年ロンドンの各図書館および書店等での調査)をおこなった。

(3) 国内および国外での研究発表: 多様な研究対象を理解するために、イギリス文学以外の研究者との交流を重視した。具体的には、イギリス文学の学会でも発表した(学会発表 と )が、同時に、女性参政権獲得については歴史研究において大いに蓄積されていることに注目し、歴史研究系の学会にて研究発表をおこない、歴史研究者の見解を取り入れるように試みた(学会発表 )。同様に、私費出版文化についての研究発表については、文化研究の学会で発表した(学会発表 )。

### 4. 研究成果

上述の研究方法による研究の成果は、おもに三つに分類することができる。(本文中の 番号は後述の「5. 主な発表論文等」を指す。)

(1) 図書、雑誌論文 ~ の発表を通して、「労働」の意味を拡大化・再定義することによって、ポストフェミニズム、第三波フェミニズムを、個別の現象として論じるのではなく、両者を包括的に論じる可能性を示唆した。ポストフェミニズム/第三波フェミニズムの近似の関係を読み解きつつ、分断もしくは連続のいずれか一方を強調するのではなく、両者の混合体としてフェミニズムの社会運動を理解するという包括的視点を取り入れる重要性を指摘した。

(2) 図書 および学会発表 において、自伝、教養小説という文学ジャンルを、社会運動の文脈において考察することで、アイデンティティの文学としてだけでなく、集団としての文学として側面の重要性を指摘した。

(3) 上記(1)におけるポストフェミニズムを第二波と分断ではなく連続として論じることによって得られた成果は、従来は盛期モダニズムの作家もしくは第二波フェミニズムの観点から理解されてきた V. Woolf という作家をポストフェミニズムの文脈から再定位したことである。これは間接的に英文学におけるモダニズム再考の可能性をもたらした。

(4) 自 zine (日本語でリトル・マガジン)と呼ばれる私費出版文化を考察し、フェミニズムおよび現代批評理論の関係空の理論構築を試みた(学会発表 )。1990年代の女性若者文化の重要な発信手段だった zine が、21世紀においてもなお facebook 等の SNS と連動しながら発展する理由を、zine が自伝的かつ社会運動(伝記的)の文学であることに注目し、承認と再分配文脈から分析した。

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

松永典子「『戦う姫、働く少女』とその後」、『ヴァージニア・ウルフ研究』(日本ヴァージニア・ウルフ協会) 査読無、24-28頁、2018年。

松永典子「Claire Battershill Modernist Lives: Biography and Autobiography at Leonard and Virginia Woolf's Hogarth Press (Bloomsbury Academic, 2018)」、『ヴァージニア・ウルフ研究』(日本ヴァージニア・ウルフ協会) 査読無、801-84頁、2018年。

松永典子「わたしを知らないなんて言わないで」、『メアリー・ポピンズ』におけるケア労働』『New Perspective』(新英米文学会) 査読あり、5-17頁、2017年。

松永典子 「歌を聴くこと、歌を歌うこと」『New Perspective』(新英米文学会) 査読無、3-4 頁、2017 年。

松永典子 「フェミニズムを自分/他人のこととして語る」『月刊女性&運動』(新日本婦人の会) 査読無(依頼原稿) 35-35 頁、2017 年。

〔学会発表〕(計 4 件)

松永典子 「英国モダニズムのシスターフッド？」日本ヴァージニア・ウルフ協会第 38 回大会、2018 年 11 月 17 日。

Noriko Matsunaga “‘Domestic’ Care Work and Postsuffragism/Postfeminism Housewife, Nanny, and Servants in Mary Poppins” Women’s History Network Conference 2018, University of Portsmouth, 1 September, 2018.

松永典子 「Zine as Applied Literature for Feminism」カルチュラル・タイフーン 2018 (龍谷大学大宮キャンパス) 2018 年 6 月 24 日。

松永典子 「ヴェラ・ブリテン『若者の証』における「働く」女の「成長」小説」日本ギヤスケル協会第 28 回大会シンポジウム、2016 年 10 月 1 日。

〔図書〕(計 1 件)

日本ヴァージニア・ウルフ協会、河野真太郎、麻生えりか、秦邦生、松永典子編著 「フェミニズムの戸惑い」『終わらないフェミニズム 「働く」女たちの言葉と欲望』研究社、査読有、183-210 頁、2016 年。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

〔その他〕

ホームページ等：なし

## 6. 研究組織

(1)研究分担者：なし

(2)研究協力者：なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。